本号は1990年の白山人類学研究会設立から現在に至るまで会長を務められてきた松本誠一教授の退職記念号として刊行した。30年にわたって白山人類学研究会を率いてこられた松本先生のご退職は，当研究会の大きな節目であるといえる。

松本先生と共に白山人類学研究会設立当初から研究会に関わってこられた立柳聡先生による巻頭言からは，設立当初の研究会の様子を垣間みることができる。筆者は研究会の歴史のいわば後半期間にしか関わっておらず，他の編集委員メンバーも私よりも若く，研究会の歩んできた歴史を知る者はいない。立柳先生の巻頭言によって30年前の東洋大学の人類学研究者の礎の上に今日の研究会が築かれてきたことを改めて知ることができ感慨深い。この機会に，古くからの会員と新しい会員が研究会の歴史を共有することは，新たな一歩に繋がり，その意味でも本号の果たす役割は大きいといえる。

ところで，『白山人類学』は，昨年度から費用のかかる紙媒体への印刷を中止し，電子ジャーナル化した。本号は費用的制約を受けることがなかったので，２つの特集を掲載することができた。第一の特集は，2018年11月17日に開催された第11回白山フォーラム「インドネシア外島部における森・土地をめぐる現場のポリティックス――企業，先住民，移住者の動きから」，第二の特集は，2019年11月23日に開催された第12回白山フォーラム「在日コリアンを中心とするマイノリティとその地域性について」の各発表者による論考である。

特集企画は今年度で12回目になり，白山人類学研究会の30年の歴史において，重要な位置を占めるようになっている。自由投稿論文が少ない学術雑誌で，特集を組んで論文を集めることは珍しいことではない。しかし『白山人類学』では毎年秋にフォーラムを開催した後で，各発表者による論文によって特集を組むという取組みを12年間継続してきたことは特筆すべきことである。２つの特集を同時に掲載することは本号が初めてであるが，フォーラムと原稿提出の間隔を調整しようとした試行錯誤の結果である。

いずれにしろ，白山人類学の歩みを象徴するような松本教授退職記念号としてふさわしい本号が無事刊行できたことは，編集長として喜びとするところである。ご投稿してくださった皆さま，そして多大な時間を割いて丁寧な査読をしてくださった査読者の皆さまに心から感謝の意を表したい。

（山本須美子）

白山人類学編集委員　Board of Editors

左地亮子	SACHI Ryoko
寺内大左	TERAUCHI Daisuke
長津一史	NAGATSU Kazufumi
松本誠一	MATSUMOTO Seiichi
箕曲在弘	MINOO Arihiro
山本須美子 *	YAMAMOTO Sumiko*

* Chief Editor